

第24期 国立市社会教育委員の会（第8回定例会）会議要旨

令和3年12月21日（火）

[参加者]

- ・くにたち市民芸術小ホール担当者
- ・社会教育委員 日野、砂押、石居、矢野、栗畑、中野、朝比奈、笹生、倉持、生島

[事務局] 井田、土方、長谷川

生島議長 さて、倉持副議長以外はお集まりです。欠席等の御連絡もないということなので、恐らく今向かわれているところではないかと思えます。定刻になりましたので、第24期国立市社会教育委員の会第8回定例会を開会したいと思います。よろしくお願ひいたします。

定数に達しておりますので、本日の会議を始めさせていただきます。

まず、本日の配付資料につきまして、事務局から御説明をお願いいたします。

事務局 事務局でございます。本日もよろしくお願ひいたします。

配付資料を確認させていただきます。お手元、一番上に次第が載っているほうの山を御覧ください。次第の下に資料1から5までございます。資料1と2は事前にお送りしていますが、資料3から5までは本日、机上で初めて配付するものとなっております。資料5については、芸小ホールさんのほうから、今回のヒアリングの参考資料として御提出いただいたものをつけてございます。

もう一つ、議事録が一番上に載っている山を御覧ください。一番上が第7回の議事録でございます。内容について修正等なければ、市のホームページに掲載させていただきます。その下に、公民館だより、図書室月報、図書館のいんぷおめーしょん、それから、順番が逆になっているかもしれませんが、とうきょうの地域教育、財団が発行しているオアシスをおつけしております。

配付資料は以上でございます。

生島議長 ありがとうございます。

では、今月から早速ヒアリングということになります。本日は国立市の芸術小ホールから、施設の担当の方へのヒアリングになります。

ヒアリングを始める前に、資料1について事務局から御説明をお願いいたします。

事務局 事務局でございます。資料1をまず御覧ください。

前回、第7回の定例会で案を出ささせていただき、会議でいろいろ御意見いただきましたものをまとめたものとして、こちらの資料1を作成させていただいております。こちらの項目は、既に財団の各館へ、回答をお願いしているところでございます。

続きまして資料2を御覧ください。こちらは「施設担当者ヒアリングの流れ」というタイトルでございますが、今回から司会進行という役を担っていただく方がそれぞれいらっしゃいますので、大まかなヒアリングの流れをまとめたものを資料としてお配りしております。基本的にはこういった流れで進行いただければと思っております。

それから、資料5も御説明いたしますと、先ほどもお伝えしたように、今回のヒアリングに当たりまして、芸小ホールさんから資料を頂いておりますので、こういった資料も御覧いただきながら、ヒアリングを行っていただければと思っております。

資料1、資料2、資料5の説明は以上でございます。

生島議長 ありがとうございます。

では、もうお待ちいただいているということで、早速ですけれども、ヒアリングを進めていきたいと思えます。

前回決めましたとおり、司会は分担制ということになっておりまして、今回に関しましては砂押委員と石居委員にお願いしたいと思えます。

では、バトンタッチさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

(くにたち市民芸術小ホール担当者 入室)

砂押委員 それでは、これから、くにたち市民芸術小ホールの施設担当者の方へのヒアリングをさせていただきたいと思えます。よろしくお願いいたします。

私、司会進行を務めます、国立市社会教育委員の砂押と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

石居委員 同じく司会進行を務めます、社会教育委員の石居と申します。図書館協議会からの選出になります。よろしくお願いいたします。

砂押委員 最初に、私ども社会教育委員の全員から、簡単に自己紹介をお願いしたいと思えます。

NHK学園の砂押でございます。よろしくお願いいたします。

石居委員 先に言ってしまいました、図書館協議会選出の石居と申します。よろしくお願いいたします。

砂押委員 あと、こちらから順番にお願いします。

日野委員 国立第三小学校校長の日野と申します。よろしくお願いいたします。

矢野委員 公民館運営審議会からの選出で来ております、矢野と申します。よろしくお願いいたします。

栗畑委員 国立市体育協会の副理事長をやっています、栗畑亨と申します。よろしくお願いいたします。

中野委員 青少年育成会の委員長会から出ております、中野と申します。よろしくお願いいたします。

朝比奈委員 私、国立市の民生委員から選出されました、朝比奈と申します。よろしくお願いいたします。

笹生委員 一応有識者ということになりますが、東京女子体育大学から参りました笹生と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

倉持副議長 東京学芸大学の倉持です。どうぞよろしくお願いいたします。

生島議長 帝京大学で社会教育を担当しております生島と申します。よろしくお願い

いたします。

砂押委員 ありがとうございます。

続きまして、御出席いただいております芸小ホールの方も、簡単に自己紹介をいただければと思います。

芸小担当者 くにたち市民芸術小ホール館長です。よろしくお願いいたします。

芸小担当者 芸術小ホールの主査、プロデューサーです。よろしくお願いいたします。

砂押委員 ありがとうございます。

ヒアリングに入る前に、このヒアリングの趣旨をお伝えしたいと思います。

第24期の国立市社会教育委員の会では、研究調査の一環としまして、市内の生涯学習関連施設における、横断・連携の実態や事例というものを、まずは把握したいと考えております。そう考えたのも、国立市の生涯学習振興・推進計画の中に、そういった横断・連携についての課題が書かれていたということもありまして、今回詳しく実態をお伺いしたいということでお願いしたわけでございます。

施設担当のお二方におかれましては、御自身の施設が行っている自主事業等での横断・連携に関わる好事例や、事業を進める中で抱えている課題等について、事前にお願ひしておりますヒアリング項目に沿って、お話しいただければと思っております。御説明いただいた後には、委員のほうから、少し内容について質問させていただきたいと考えております。

1時間程度と思っておりますけれども、こういう時期でもありますので、なるべく早く終わればと思っておりますので、何とぞよろしくお願いいたします。

それでは、資料に基づいて御回答のほうを御紹介いただいでよろしいでしょうか。

芸小担当者 主に私のほうから御説明を申し上げます。

資料は2種類御用意いたしまして、文章だけの「芸術小ホール資料」というもの、もう一つ、表になっているものがあります。表のほうは御参考にといいことで、御覧ください。文章のほうで御説明していきます。

設問で、他の施設・機関等と連携して実施している特徴的な事業ということでしたが、他の施設・機関というのが市内に限ってのことかなとちょっと思ったのですが、取りあえずもう少し広い意味で、私どもとして他の機関、施設と連携しているものということで掲げてみました。[1]から[5]まで分けております。

[1]は一般財団法人地域創造との連携としております。

この地域創造という団体ですけれども、1990年頃に当時の自治省と、全国の地方団体等と組んで作られた一般財団法人なのですが、当時非常に箱物行政みたいな批判が強くて、地域における公共ホール、もうちょっと頑張りなさいよということで、要するに担当者の企画力を伸ばすこと、それとそういった企画を通して地域の活性化をつなげなさいということでつくられた団体です。非常にいろいろな事業がありまして、そこに、基本的には私どものような公共施設が、これをやりたいですと申請書を出して、企画書のようなものなんですけれど、それが通ればその事業を実施することができると。大概是予算的な、お金の援助も受けられますし、企画直接に携わるような、例えば人を派遣してくださったり、リストを紹介、あるいはアーティスト派遣ということをやっているところなんです。

ということで、この団体との事業というのが幾つか過去にありまして。現在動いているのは1番の公共ホールクラシック音楽活性化支援事業、それと今年もやりましたが、2番の公共ホール現代ダンス活性化支援事業、3番は過去にやったものも書いております。

この中で、ホールで何か公演を実施するのと同時に、アウトリーチという手法を必ず取り入れるようにということがあります。アウトリーチというのはそのまま、外に伸ばす、つまりホール、文化施設の中から特にアーティストをどこか外に連れて行って、活動するということなんですね。もともとは公演にいかにか人を呼び込むかということところが目的ではあるんですが、やってみるとそれぞれの現場で、特に教育現場が多いんですけども、やはりいろいろないいものが出てくる。

後のほうでも出てくるんですけど、皆さん大体、小学校時代に体育館で何か見たりしたことがあると思うんですけど、そうではないんですね。クラスごと、非常に人数を限った対象で行うんです。だから取りこぼしが無い。そこが非常に大事なところでして。逆にそれが学校側として受け入れづらいところもあるんですが、そのことが非常に功を奏して、音楽の教育といったことにつながるのもあるんでしょうけれども、もうちょっと違った意味も、アーティストってこんなふうを考えていて、生きているんだとか、こんな変わった人がいるんだとか。自分はちょっと勉強できないけど、こんなことだったら面白そうだなとか。そういった福祉的なといいますか、そちらのほうにまで効果があるということが言われております。それについてはいろいろ資料があると思いますので、御興味があればお調べいただければと思います。

ちょっと戻りますけれども、クラシック音楽と現代ダンス、ちょっと分かりづらいんですが、こういったことを通じて、そのような事業をしてまいりました。

[2]は東京都歴史文化財団。これは東京都の文化財団なんですが、そちらとの連携というのもやっております。1から5まであるんですけども、東京文化会館もアーツカウンシル東京も、この歴史文化財団の中にある団体なんですが。毎年やっております1番のフレッシュ名曲コンサートであるとか、2番のオリパラ事業、これはアーツカウンシルでやっています。3番もオリパラですね。4番の子どもたちと一緒にダンスの舞台を作るという事業であったり、5番は多分10年ぐらい前ですけど、平成24年頃に多分やっていたんですけど、こういったこともやっております。

これらに関しましても、場所は私どもを拠点としまして、アーティストが派遣されたり、都の助成金が交付された事業となっております。

[3]国立音楽大学との連携ということで、やはり地域におけます文化芸術の範囲におきましては、非常に大切な地域資源ということで国立音楽大学とも連携しましょうということで、1番の「ピアノ300年物語」というのが多分10年、11年ぐらい前ですか、それに端を発して、音大との連携がつながっております。音大生あるいは卒業生の演奏会ということですね。

[4]はアウトリーチ事業となっておりますが、これは私どもの主催事業としてやってございました。先ほどの[1]と[4]のアウトリーチ事業をまとめたものが、この別紙の記録一覧表となっております。

ざっと見ていただきますと、やはり小学校が割に多いです。ただ、後でも言いますけれども、小学校もやはり受け入れてくださるところと、難しいよと言うところが、今のところどうしても偏りが出ちゃってしまっていて、三小さんなどは、まだまだ行けていないところもありまして、それをこれから、どうやって全部の学校を回っていかうかというところですよ。

ただ、私どもも人の数であったり予算も限りがあるもので、この事業は今、

先ほど言いました音楽活性化事業のほうにシフトしてしまっていて、止まっているような状況です。

[5] その他といたしまして、こういったところといろいろ共同してやっておりますということで、御覧いただければと思います。

一番下、今後の予定ということで、フレッシュ名曲コンサートであるとか、クラシック音楽活性化支援事業であるとか、そういったことはこれからも続いていくし、1番の文化庁巡回公演というのは、私としては特筆したいと思っていますところです。私どもで作った舞台の作品が、文化庁の巡回公演というのは、いろいろ演劇とかありまして、リストがあるんですけど、その中から小学校等が呼びたいと選ぶわけです。私どもの作品がそのリストに入りまして。学校のほうからオファーがあるかどうかは別として、初めての応募で入れていただいています。なかなか珍しいことだそうです。

ちなみに、もしこれが巡回に行くことになると、僻地か離島ということになっておりまして。来年度ですが、行ってみたいなと思っていますところです。

以上が、設問の(1)に対するものです。

続きまして、アの、その事業の内容や連携先、連携を始めた経緯や狙いということで、ここに書いているんですけども。

今、申し上げたところもありますけれども。やはりお金的な、助成が得られるということが非常に大きいです。それと、紹介してもらえる、あるいは派遣してもらえるアーティストが、なかなか私ども単館だけではお付き合いがづらい方々を呼ぶことができる。あるいは、そこからどんどん広がって、内容的にも広がるし、またお付き合いする方も広がっているなというのが印象ですね。

次にイ、連携している内容、連携先との役割分担や連携に当たっての工夫ということで、これも今申し上げたようなところなんですけれども。ここに書いた共催というのは、主に今申し上げたような助成金が得られるということで、そのほかの制作は私たちがやらなきゃいけないわけです。協力となると、私どもとしては制作、広報を分担してやったり、アーティスト紹介をするだけということになったりもします。

ウ、連携を行ったことによる効果や感じている課題。これもこちらに書いてあるとおりでございますけれども、とにかく広がっていくし、私たちの名前もどんどん出していけるといいうところがありまして。例えばホールだと、その中だけで完結ということにいかないといえますか、お客さんを外から呼ばなきゃいけないですし、私たちの名前というのもどんどん売っていかなくてはいけないし、私たちのホールの特徴みたいなものもどんどんアピールしていきたいというところで、こういった連携事業というのが役立っていると思っています。

もうちょっと具体的に言いますと、[1] から [5] に書いてあるとおりでございますけれども、制作のノウハウが蓄積できたとか、非常に著名な方を呼ぶことができたとか、例えば [2] のフレッシュ名曲コンサートは、これも7、8年前になるんですけど、とあるアーティストさんが決まっていたのですが、その方、非常に優秀なピアニストなんですけれども、突然ロシアの先生に見初められてロシアに行ってしまうのですが、そのピアニストがこの間ショパンコンクールで2位を取った反田恭平さんです。また、出演いただいたことがある務川慧悟さんは、今年の8月ですか、エリザベト王妃国際音楽コンクールで3位を取った方です。要するに伸びる方、売れるのが分かっているような方々が来てくれるようになっていきます。最近でも、弦の人でも何の人でも、どんどん著名になっているアーティストを呼ぶことができ、非常にありがたい事業となっております。

課題がありましたね。すみません。課題のところはちゃんと言ったほうがいいですね。地域創造のことですと、非常にいろいろな事業をやってらっしゃる

んですけれど、やはり私どものスケールとか規模、人数もあるんですけれども、そういったものとなかなか合わないものがあったりするんですね。例えば演劇関係ですと、演出家を学校に派遣して、演劇を作りましょうみたいなものもあったりするんですけれど、それはなかなか学校にとってはハードルが高いんじゃないかと勝手に思っちゃうんですけれど。そんなこともあります。徐々に私たちとしても、どうすればできるのかといったところを探っていきながら、そういったことも積極的にやっていきたいと思っています。

〔3〕国立音楽大学との連携ですけれども、何か特徴あることをやっていこうということで、例えば立川市でも国立音楽大学との連携事業ってやっているんですけれど、どうしてもクラシックが多いんですね。私たち、小さいところなので、逆にそれを生かして、ちょっと変わったことをやりたいということで、現代音楽を中心にやっていきたいと思いますということにしたんですが、非常に集客が難しいので、そこは課題かなと思っています。

〔4〕のアウトリーチ事業ですが、今日ここが一番申し上げなくてははいけないんですけれども。例えば年1回、必ず全部の学校に、同じ学年にこのアウトリーチ事業を展開することができたら、それはいいのかなと思うんですが、なかなかそこまで行ってないんですね。年に一度で6校ぐらいですか。もちろん学校さんのほうの都合もあるでしょうし。ただ、これを何とか、国立市で小学校生活を送れば、必ず1回はアーティストとの接点が身近に持てるみたいにしていけたらいいかなと思っています。

あと、内容についても、音楽をやったり、落語をやったり、いろいろあるんですけれども、単なるお楽しみ会にならないようにするには、どうしたらいいのかということは考えています。なかなか難しいんですけれど。

それと、今は予算がないもので、前述の音楽活性化事業のほうにアウトリーチを集約しちゃっていますが、この音楽活性化事業はあと3年ぐらいあるんですけれど、それが終わった後にまたこれを再開していきたいんですが、より組織的にやっていきたいと思っています。

その他の部分でいうと、企画性ってすごく大事でして、お金を出して誰か呼んできてポツとやるというものでもなくて、やはりその都度、この場には、あるいはこの企画にはどうしたらいいのかなというのを考えていかなきゃいけないので、それなりに時間と能力というか、やはり企画力が必要と思っています。

(2) 他の施設・機関と連携する必要があると感じているものの、できていないものということでは、やはりアウトリーチ、先ほどから言っているところですね。学校を中心に、ぜひこの事業を進めていきたいと思っていますので、現場の学校さんのほうはいろいろ大変でしょうけれども、ぜひ受け入れてみよかなというふうに思っただけだと、検討に入っただけだと、うれしいなと思っています。現在、活性化事業の担当者は、校長会のほうに時々お邪魔して、御説明して、ぜひ受け入れてくれませんかみたいなお願いをしているところでもあります。

最後、コロナ対策です。逆にそれで始めた連携の取組ということでしたいたんですが、困難ということでは、やはりなかなかアウトリーチの受入れが難しかったというのがあります。よかったこととといいますか、新たに始めたことでは、いろいろ事業がどうしても中止になったり、延期になったりしたんですが、それではいけないということで新しく小さな作品を作ったのが、先ほどの文化庁の学校巡回事業に採用されたということで、芸術活動が繋がってよかったかなと思っています。

すみません。早口なので、ガーッと話して分からなかったかもしれませんが。ひとまず以上です。

石居委員 ありがとうございます。

それでは、ここからは説明いただいた内容に関して、御質問あるいはもう少し詳しく伺いたいというようなところを伺うという時間にしたいと思います。今、お答えいただかなかったこと、あるいは事前に出したヒアリング項目以外の内容で、何か追加で伺いたいというようなことがあれば、そちらも併せて出していただいても構わないと思います。

お答えの形式としては、基本的にはヒアリング項目に対応する形でお答えいただいています。1つずつやっていくと時間がなくなってしまうと思いますので、皆様それぞれ、御自身の関心に基づいて引っかかったところ、どこからでも構いませんので、御質問、御意見等お出しただけければと思いますが、いかがでしょうか。

矢野委員 矢野です。たくさんの事業をされてお忙しそうなのですが、事業企画の担当というのは何名いらっしゃるんですか。

芸小担当者 主にフレームを決めているのは私です。その個別の中身を決めているのは、私プラスあと2人ですかね。

矢野委員 じゃあ、3人でいろんな事業を、落語からクラシックまで、いろいろな調整も含めてされているんですね。

芸小担当者 はい。企画的にはそうですね。ただ、実施に当たりましての準備ですとか進行については、もうちょっと、嘱託員さんもおりますので。

矢野委員 常勤では3名と。

芸小担当者 そうですね。

矢野委員 今の御説明にはありませんでしたが、事業報告書の中で市民の参加というところで、市民参加オペラの上演を目指し市民ワークショップを実施予定でしたが、2020年度はコロナ禍で延期になりましたということで。多和田葉子氏がオリジナルの脚本を書いてというものですよね。それは今、進んでいるんですか。

芸小担当者 進んでいます。その作品、脚本もちろん多和田さんの新作ですし、作曲も新作で。かなり大変なことになっていますけれど、市民の方、公募しましたら集まってくれまして、小学校3年生から、一番上が84歳ですか、今、28人ですかね、非常に頑張っていていただいております。

矢野委員 ありがとうございます。

中野委員 中野です。まず、連携をすることによって、どういう効果があったかという中で、事業自体の成果というものが中心に書かれていると思うんですけど、学ぶといいますか、こういった事業ですので、生涯学習という観点から見て、参加された方がこういう連携によって、こういう学びが深まったとか、またもう一つ、かなり力を入れていらっしゃるアウトリーチ事業というのは、学びの観点から見て効果があるんじゃないかとお聞きしていたんですけど。そういった面での解析というのはされていないんでしょうか。

芸小担当者 このことに限らず、私どものような施設の成果をどういうふうに分析するか、解析するかということは、数値だけではないということを最近言われているんですが、アンケート等で見ているんですけれども。やはり参加した子供たちが、今まで知らなかったこと、経験したことがないことを知ることがあって、面白かったと言うとちょっと語弊があるんですけれども、違うことに興味を持つことができたであるとか、特別支援クラスに行くこともあるんですけれども、普段とは違う表情を見ることができたという先生からの言葉であるとか、普通に生活していたらなかなか出会えない人たちと会えた、つまりアーティストとの出会いがあったということは言ってもらえますね。

ただ、私たちとして気をつけなきゃいけないと思っているのは、私たちは教育機関ではありませんので、目的は芸術、文化にいかに関心してもらおうを増やしていくかということなので、例えば音楽であれば楽器の知識が増えたとか、落語であれば落語の見方が分かったということも非常に大事なんですけれども、言葉でうまく言えませんけれども、やることによって子供たち一人一人が何を受け取るか、そこをのびのびと広げていきたいというか、そこを大事にしていかなくちゃいけないんだなということ、思っています。

芸小担当者 私も参加したんですけれども、まず興味を引くために、今年はサクソフォンのカルテットでやったんですけれども、本物の音を聴くということで、子供たちの目の輝きが違うんですね。これは去年だったんですけれども、「鬼滅の刃」のテーマソングで行進してきて、音楽室に入って、なおかつ学校ごとの校歌をしていただきまして。もうそれだけで、前にいた子なんか感激しちゃって、「すげえな、校歌もやってくれてる」なんていう形で喜んで。その子、顔を覚えていたので、ホールのほうでコンサートをやったときにも来場してくれて、楽しんでいってもらったというような実態があります。

中野委員 ありがとうございます。

笹生委員 東京女子体育大学の笹生です。まず、詳細な御説明をいただきましてありがとうございます。

やはりアウトリーチ事業にすごく力を入れていらっしゃるということが一番印象的だったんですけれど、今は一本化されているということでしたが、このアウトリーチ事業ってやるほうも大変だと思うんですね、多分。なので、これはひょっとして地域創造から結構やってくださいという要望があってやっているのか、それとも芸小ホールの判断として、やっぱり必要だと思ってやられているのかという辺りを。

芸小担当者 地域創造の事業の中でやっているアウトリーチというのは、これはやらなくてはいけないものになっているんですね。一番初めにアウトリーチをやったのも、十二、三年前、地域創造との事業で私は学ぶことができましたし、そのノウハウを生かして、自分たちでこのアウトリーチ事業、「芸術をプレゼント！」というのをやり始めたというところがあります。

笹生委員 なるほど。よく分かりました。

そうすると、今は一本化してということなんですけれども、やはり御苦労が大変多いと思うんですけれど、ちょうど館長さんがおっしゃったような形で、結構アウトリーチして、ホールに返ってくる人が増えるなという印象は、やっぱり全体としておありなんですか。

芸小担当者　そうですね。アウトリーチをやりまして、その後コンサートがあるわけですが、子供たちが来てくれたり、親御さんと一緒に来てくれたりというのはありますね。

笹生委員　なるほど。ありがとうございます。

生島議長　今のに関連して。よろしくお願いたします。御説明ありがとうございました。

学校に対してのアウトリーチということが、学校が相手になっているんですけども、学校以外のところへのアウトリーチ、例えば公民館ですとか、何かそういった社会教育の場とか、大人向けに対してのアウトリーチ活動というのがあれば、御紹介いただければと思ったんですけども。それか、もし何かやりにくさとか、こういうところでチャレンジしているというようなことがあれば、一緒にお答えいただければと思います。

芸小担当者　大人向けというのであれば、こちらの記録一覧表で、結構以前になるんですけども平成24年度の、南区公会堂であったり、その翌年の北市民プラザであったり、同じ25年度、六小のPTA向けというのもあったりします。

この南区公会堂のときは、多分この事業だけでは人が来ないと言われて、南区公会堂でやっている地域の人たちの会があって、そこと一緒にやってくれませんかということを言われましたね。集客ができないのかなど。落語ならもしかするといいのかもしれないんですが、クラシック音楽ですとか、現代ダンスだとなかなか、それをどうPRしていいか分からない、受入先の協力がものすごく必要なものですから、そこはどうしても、先方の意見を聞いて一緒にやっていけないところがありますね。

ちなみに、平成25年度の北市民プラザというのは大雪の日で、もう全然、本当にどうしようもなく。でも、演者さんは来ると言うんですね。さすがですよ。でも、車が動かないぐらいだったんですけど。先方も「何で来るの」とかって、最初引いていたんですけど。でも、まあ、何とか七、八人来てくれました。ありがたかったです。

生島議長　そうすると、そこに関心を持ってもらうことにはかなり尽力していかないと、アウトリーチをやってもなかなか効果が見えにくいということがあるということですね。

芸小担当者　そうですね。大人向けも、かなり目的を絞ってやっていくほうがいいんですかね。落語をやりますとんでも、やっぱりお楽しみ会になっちゃうと意味があるのかなと思いますので、集客につなげましようとか、その方の生きる楽しみをもっと広げてあげましようみたいなところで、何か必要ですね、工夫が。

生島議長　今の追加で。そうしたときに、例えば企画を練り上げていくとか、PRをするというのはどちら側が。施設側がやるんですか。それとも芸小ホールさんのほうが持ちかけていくという形になるんですか。

芸小担当者　両方ですね。広報に関しましては、チラシは私どもが作ったとしても、それをどこに配るかとか、どういう方法で広報するかというのは、先方のマターになってきますよね。本当に協力が必要です。

生島議長 ありがとうございます。

朝比奈委員 今のに関連して。大人向けということで何か所かされているんですけど、芸小さんからのアプローチじゃなくて、地域からのアプローチといいますか、やっていただけますかということも可能なんですか。

芸小担当者 可能ですね。それに近いものでいうと、資料1枚目の[5]その他の、スーパーさえきさんから、御自分のところで場をつくって。新しい店舗にしたときですかね、ちょっとした広場があって、そこでやりたいということをお願いしたので、2回ぐらい演奏家の方を御紹介しましたね。喜んでやらせていただきました。

朝比奈委員 そういうことができると、地域の学びの場が広がっていくというか。地域にない学びの資源を提供していただけるというのは、とてもありがたいことだなと思ひます。

芸小担当者 そうですね。受入先の方々の御要望と、お互い本当に一緒にやっていくという形ですね。単なる、派遣しました、やりましたではないものをつくってきたなと思ひます。

栗畑委員 ちょっと質問してよろしいですか。栗畑です。今のことをもうちょっと具体的に聞きたいんですけど、スーパーさえきさんが、コンサートをやりたいと言ってきたわけですか。

芸小担当者 そうなんです。

栗畑委員 それは例えば、芸小さんに行けばそういう相談に乗ってくれるというのを誰かから聞いてきたのか、それともただ近くだからとか、どういうきっかけだったんですか。その辺のお話は。

芸小担当者 スーパーさえきさんの偉い人から御担当の人が、何かここでやることを考えなさいと言われてちゃって、その方非常に困ってしまったのですね。たしか、最初は市役所に行ったのかな、どこに行ったのかな、何か行ったんですけど、そんな派遣事業はやっていないので、たまたま芸小を通りかかって、もしかしたらと思ひて飛び込んできてくださったと。

栗畑委員 はあ。たまたまですね。でも、そういう事例があったんですから、そういうアナウンスというかアプローチを、このオアシスでも何でも、やったことはないんですか。

芸小担当者 やっていませんね。振り返りといいますか。それが全然、私どもできていないんですよ。というのは、言い訳ですけど、すみません、忙しいです。その場がなかなか。

でも、ものによってはホームページであったり、たまに広報誌のオアシスに載せたりもするんですけども。なかなかできていませんね。

栗畑委員 資料の3ページ目、(2)のイ、課題を解決するために考えていることでアウトリーチ。例えば、この「おんかつ支援」で学校側への働きかけ、校長会での

派遣先の募集など説明に行っていますと。これはアプローチしているわけですね。私たち、こういうことをやっていますので、どうですかという活動をされているわけですね。それが、校長会以外に具体的にもっとあるのかなという質問だったんですけれど。

芸小担当者 ここに校長会と書いてありますが、その前に書面で各学校の校長先生宛てに、こういうことをやりますけれども、受入れいかがですかというのを差し上げております。で、その後追いのような形で校長会の場をいただいております。

あとは、都度、先生方と接触したときに、何かありましたらいつでも行きますということはおっしゃっております。個別にですね。

栗畑委員 ごめんなさい。学校のことは分かりましたので、学校以外での働きかけということですね。

芸小担当者 それは、私どもの企画としてこういうところにアプローチしたいということで、私どもからの接触になります。例えば、神の国寮とか、自治会、先ほどの南区公会堂とか北市民プラザというのは、私どもから接触を求めましたね。あと、平成30年度の一橋大学というのも、私どもからお願いをしたところがございます。

それは文化芸術をどこに届けなきゃいけないかということ考えたとき、まだここには届いていないんじゃないかということに、私どもから当たっているということになります。

栗畑委員 連続して申し訳ありません。最後にしますので、1つよろしいですか。

見ると、クオリティーが高いということはよく分かりました。本当に国立市民であることを誇りに思うぐらい、クオリティーが高いと思います。

課題の中で見ていると、予算とか、スタッフの人数とか、能力と時間という言葉が書かれているんですね。簡単に言えばお金と人が足りない。私たちはクオリティーの高い企画は持っているけれども、お金がもっとあったり、もうちょっと人数を増やしてくれれば、いけば、もっともっと高い質のものを広げることができるというふうに解釈しているんですけど、いかがでしょうか。

芸小担当者 そうですね……。

栗畑委員 やっぱその辺を訴えたいのであれば、我々もそれを吸収したいと思えますし、できる、できないは別にしまして。

芸小担当者 さっきも振り返りができていないということをおっしゃったんですが、これは本当に反省です。お金がないとか、人がいないとかいうことを言い訳にするつもりもなく、もうちょっと一つ一つの事業と大事に向き合っていきたいなというのは思っています。ちょっと事業が増え過ぎちゃったかなという感じもしますね。

アウトリーチは外に行きますからまだいいんですけど、芸小ホールの中でやっているものに関しては、本当にいっぱいいっぱい。というのは、部屋数もないので、私たち貸し館事業というのも、要するに自主事業と貸し館事業は両輪で、両方なきゃいけないもので。私たちのやりたいことばかりやっている、場所がなくなっちゃって貸せないんですよ。それは非常に大きな問題ですね。市民の方々による自主的な貸し館事業というのはやっていかなきゃいけ

ないし、そっちも携わらないといけないので。

ですから、単純に予算が増えました、人数が増えただけでも解決はしないかもしれませんが、アウトリーチだけに限って言えば、例えばあと1人、2人増えると、もっと充実させることはできるかもしれません。

日野委員 日野です。学校のほうは資料にもあるんですけれども、三小は何度か御世話になって、ありがとうございます。アウトリーチという中で、学校のほうに広げていきたいという考えも伺いまして、私も校長会等の機会で、まだここに出てきていない学校の校長先生方には伝えていく必要があるのかなと思いつつ、伺っておりました。

先ほどスーパーさえきの事例でも、個別に打合せをしてというようなことだったんですけれども、学校のほうにもそういった形で、頂いている資料ではプログラムの例みたいなものを挙げていただいているんですけれども、そこと違うんですけど、こういう形ならできるみたいな、そういったオーダー的なことというのを詰めながら進めていくというのは可能なんではないでしょうか。

芸小担当者 それに近いものは、資料1ページ目の[5]の3番、八小さんで、展覧会で何かやりたいというのが。というのは、八小さんが文科省か何かの助成金をお取りになったんですかね。それで、何かやりたいんだけど、美術関係でというふうに言われまして、ちょうど美術と演劇を組み合わせたいようなことをやっている人を知っていたので、御紹介しまして。要するに御紹介ですよ。間に立つというか。私どもはお金を頂けませんけれども、そういうことで後は進めてくださいという形での御紹介も可能ですし、もうちょっと中身に関して関わってよというのであれば、それは何とかしたいと思えますけれど。

日野委員 ありがとうございます。

砂押委員 私からも。国立市の生涯学習振興・推進計画というのを、私はずっとバイブルのように読んでいますけれども。その中に、政策3で生涯学習の環境づくりとして、「図書館や公民館、郷土文化館、芸術小ホールなど、それぞれ機能を異にする社会教育関係の施設・部署の連携を進め、運営の質向上を図ることで、既存の生涯学習施設をより一層効果的・効率的に活用します」と書いてあるんですが、そういう市の施設との横の連携みたいなものというのは、あまりないんですか。

芸小担当者 そうですね。本当に広報を手伝っていただくとか、そういったことですかね。郷土文化館は同じ財団でもありますけれども、共同で何か企画しましょうみたいなこと、頭をよぎったことはありますが、やったことはないですかね。

砂押委員 分かりました。

もう一つ伺いたいのは、先ほど企画を担当されているのが3名の方がいらっしゃる。プロデューサーの主査の方と非常勤の方が2名で、3名の方ということなんですけれども、先ほどの地域創造という団体であったり、東京都の歴史文化財団であったり、そういうところに申請をするわけですよ。その申請の仕方というのは、クラシック音楽でやりたいとか、演劇でやりたいとか、そういう申請の仕方になるんですか。

芸小担当者 それぞれの事業がもともと音楽事業であったり、ダンスの事業であったりということで、ジャンルが広くということはないですね。

砂押委員 申請できるものは、限られているわけですか。

芸小担当者 いろいろあるんですが、私どもとして申請できるだろうなというところをやっていますので、クラシック音楽であったり、現代ダンスであったりですね。

砂押委員 大変失礼ですけれど、落語であるとか、クラシック、ダンス、アウトリーチのところにはパントマイムとありますけれども、どちらかというところと小中高生向けというようなものが中心で、幅の広さという意味でいうと、あまり幅広くはないかなとちょっと感じたのですが、もっとたくさん、ここではいろいろなプログラムを用意しているわけではないんですか。

芸小担当者 いろいろあります。演劇の事業なんかもあったりしますね。

砂押委員 呼ぶには、それは人材の問題じゃなくて、施設のスペースとかそういうのが問題で、呼べないということでしょうか。いわゆる人の教育の問題、幅広い企画ができるのか、できないのか、人材育成の問題なのか、単なる物理的な施設の問題なのか、どちらなのかなと思ったんですが。

芸小担当者 両方ですね。演劇、今やっているオペラもそうですけれども、演劇って結構、私たちにとってはハードルが高いです。

砂押委員 やっぱり皆さん、それぞれ3人の方が何か好きな分野とかお持ちで、その分野なら得意だけど、こっちはちょっと苦手という感じの状況だと。

芸小担当者 それはないですね。好き嫌いはあまりないですね。

ちなみに、オペラに関しては本当にお金がかかりますので、4本か5本ぐらい助成金を申請しています。それはつまり、もともとジャンルが決まったものというんじゃないくて、お金が欲しい。この事業に対して、この内容に対してお金が欲しいという申請の仕方をしております。

砂押委員 お金だけくれるわけですか、そうすると。

芸小担当者 まあ、そうですね。

砂押委員 いろいろな、人材育成の面も少し関係しているとする、人材育成というのは、今のこの3人の中ではなかなか難しいのかもしれないですけど、どういうお考えで、何か取り組んでいらっしゃるようなことがあったら、教えてもらえたらと思うんですけど。

芸小担当者 すごく厳しい質問ですね。それは本当に、どうしようかなと思っているところです。今日も、来年度の事業の分担を考えていたんですけども。何と申し上げていいのかわからないんですが、館長と私以外は全員嘱託員なんですよね。さっき言った事業担当の2人というのも嘱託員で、毎日はいるんですけども。それ以外の方々というのは、受付が主な担当で、ローテーションなんです。でも、その人たちも事業を担当してもらわなきゃいけない。どうしても時間の限り等もありますので、誰にどれを担当してもらおうと、その後もつなげてもらえるかなというのは非常に悩ましいところで。育てなきゃいけないと

いうのは、どんな組織もそうなんですけれど。

砂押委員 でも、嘱託というと、5年ぐらいで終わったりするんですか。

芸小担当者 いえ、今は。

砂押委員 ずっと続けてらっしゃる。

芸小担当者 1年ごとの更新ということで、その方が辞めない限りは、一応続けていただければ。

砂押委員 無期の契約職員みたいな感じで、ずっと続けられるわけですね。年限を切られて、大体5年ぐらいで職員にしなきゃいけないとかいうルールがあると、大体5年で人を変えちゃったりするケースがよくあるものですから。

そういうことで、人材育成に困っているのかなと思ったんですけど、そういうわけではないんですね。

芸小担当者 うーん、何とも。そうですね。作り方が分かりやすい事業であれば、そういう人たちにも任せられるんですけども、ちょっとそうではない事業もあるわけで。それには蓄積が必要ですし、かなり時間をうまくやりくりしてやってもらわないと、どんどん残業ばかり増えてっちゃって、よくないことなので。その人の適正の問題もありますし。そういうことを考えながらですと、あんまり飛び過ぎたこともできないのかなと思いつつ、やってしまっていますかね。

砂押委員 でも、こういう他団体と連携する上では、そういう窓口になるような方と、仲よくなって向こうにちょっと食い込むみたいな感じということは必要なんじゃないかなと思うのですが。

芸小担当者 絶対に必要です。どんなきっかけも、知り合ったら攻めていくみたいなところはありますよね。

砂押委員 そういう意味で、いい人を探って、いい人が育てば、いいものができていくのかなという感じは持ちますけど、なかなか難しいですね。

倉持副議長 倉持です。一つは確認なんですけど、度々すみませんが、このアウトリーチ活動、現状においては予算の都合とか、連携先、受入先の事情とかいろいろお話があったんですけど、現状においてはこの地域創造との連携がなければというか、その枠で基本的にアウトリーチ活動を実現しているということなので、連携があるから継続できているというふうな理解でいいでしょうか。

芸小担当者 そうですね。はい。それ以外に予算が取れていないので。

倉持副議長 逆に言えば、連携があるから、この3つがアーティスト活動を、「おんかつ」ということに組み換えることによって、アウトリーチ活動が続けられているということでもあると。

芸小担当者 そうですね。今はジャンルが限られてしまっていますが。

倉持副議長 基本的に地域創造とのつながりというのは、すぐには切れるものではないぐらいの関係性ができているということ。

芸小担当者 はい。おかげさまで、向こうからもいかがですかと声をかけてくださいますので。

倉持副議長 継続的に連携して、それなりに実績を出していて、お互いにウィン・ウィンの関係性になっているということですね。ありがとうございます。
もう一つは、2ページ目の真ん中あたり、[5] その他のところに、地域ホールとしてのミッションというキーワードがあるんですけど、ここの部分、もうちょっと補足の説明をいただければうれしいと思うので、お願いします。

芸小担当者 地域の人と一緒にやっていかななくてはいけないというところで、いろいろな人がいるわけですけど。高齢者から赤ちゃんまで。その人たち、あるいは障害者であったり、引き籠もっちゃっている人であったり、いろいろな人がいるんですが、できる限り多くの人に、文化芸術を届けるのが私たちのミッションだと考えているところです。なかなか難しいですけど、でも、やってかなきゃいけないと思っています。

倉持副議長 ありがとうございます。

砂押委員 砂押です。地域創造と東京都歴史文化財団、あと国立音大、このほかの団体に手を伸ばそうとか、そういう活動というのはどうですか。広げていこうという取組ですね。

芸小担当者 例えばなんですが、1ページ目の[5]の2、国文学研究資料館と国立市、この国文学研究資料館などはこれから組んでいきたいなと思っているところです。

砂押委員 そういうときには、飛び込みで行くわけですか。

芸小担当者 いえ、おかげさまでここはつながりができましたので、これは実際に話をいただいたのは副市長経由、つまり、私どもの理事長経由で、こういう事業をやっているからやったらと言われて、取り組んだ事業なんですけれど。

砂押委員 そういうところでの苦労というのは、いわゆる新しいところと組んでいきたいとき、たまたま理事長が情報をくれたということとは組んでいけるけれども、新しい生涯学習を充実していくということであると、ほかのところ、国立音大だけじゃなくて、東京女子体育大学でも何でも営業活動みたいな、いろいろ連携先を探すような活動というのは、なかなか手が回らないというような状況ですか。

芸小担当者 いえ、必要に応じてやっていますね。東京女子体育大学さんには、これはちょっと連携という言い方は難しいかもしれませんが、今やっているオペラの稽古の場所がなくて、新しい体育館でやらせてもらえませんでした、この間お電話したところだったんですけど、ちょっと難しいということだったんですけども。

笹生委員 すみませんでした。

芸小担当者 そういったことだったり。いい活動をしている団体があると、そこにアプローチしたりというのはやっています。人がいる、いないということよりも、私どもでやっている事業の中で必要に応じてといいますか。やってはいるところですね。

石居委員 私から。まず、お話をありがとうございます。皆さんの御意見を伺ったの印象は、すごく積極的に施設の側から、言い方がいいかは分かりませんが、押しかけていく姿勢というのが、すごく強い活動の根幹にあるんだなということ、それは芸術が届いていないところに届けるという思いから来ているんだなというふうに思ったんですね。その一方で、そうした活動が、一度そこに届けたら終わりというのではちょっと寂しいので、その届いた先で、そこで受け止めた人たちが、御自身でももちろん学習活動につないでいってくれば、それでいいとも言えるんですが、それがもう一度施設の側に返ってくるような形になると、とてもいいなと思っています。

それが、口コミなんかを通して芸小さんに相談をすると、こういう催しをやってもらえるよとか、アウトリーチに来てもらえるかもしれないよというような、そういうところにつながっていったりすると、あまり芸小さん自身がリソースを割いて営業していかなくても、二次的、三次的に広がって行って、あまり御負担にならずにうまく、芸小さんにとってもメリットになることがあったりしないのかなと、僕自身も直接自分でやっていないので、つついそういうことってないんだらうかと考えてしまうんですが。そういうことがあれば、過去にあれば教えていただければというのものもあるんですが。そんなことを一つ考えました。

もう一つは、先ほど貸し館事業とアウトリーチを中心とした事業が両輪だというふうにおっしゃっていたと思うんですが、そういう意味でいうと、貸し館事業を通じて芸小さんを使っているような団体がうまく、芸小さん自身のもう片輪であるアウトリーチというところに、何か絡むことはできないのか。例えば貸し館事業に関わっている主体の人たちが、芸小さんにアウトリーチをやってくれないかと持ちかけてくることもあるかもしれないし、逆に何かしら芸小さんが企画をつくっていくとき、貸し館事業でつながりができている団体をうまく引き込んで使っていくというか、そういうようなことがこれまでにできたり、できそうだったりということはあったのかどうなのかということが、もしあれば伺えればと思いますし、逆にそういうことがないのであれば、どういう課題があってそこがうまくつながらないのかということも、もし分かれば伺えればと思うんですが。いかがでしょうか。

芸小担当者 うちのお得意様ですね。いろいろな形がありますけれども、その中から、私どもでやっている「市民一芸塾」という講座があるんですけども、その講師をやっていたりとか、その方々から御紹介いただいた方と事業をこれからやっていこうということがあったりというのはあります。

貸し館事業と自主事業の、一応そこは区分けしなきゃいけないと思っているのが、貸し館事業というのは利用される市民の方中心なんですけど、あくまでも本当に主体的な、自主的な事業であるわけですよ。極力その内容、クオリティーに対して、私たちは言う立場にないので、素晴らしい方はもちろんいっぱいいらっしゃるんですけども、必ずしもイコールにはしないほうがいいのかなというのは思っています。

石居委員 究極的に言うと、やっぱりクオリティーの問題というのが大きいですか。

芸小担当者 それもあるかもしれませんが、要はやり方です。協力事業だったり、共催事業だったり、いろいろあったりはしますので。それは必要に応じて考えていくことはできますし、あまり覚えてないんですけど、思い出せないんですけど、そういったことはあったんですかね。

石居委員 あともう一つ。先ほど市の施設との連携が頭をよぎったこともあったけれどもというふうにおっしゃっていたと思うんですが、実際には連携には至らなかったということだと思ってるんですが、その話を伺いたいと思ったのは、よぎったけれども最終的にやらなかった、できなかった、その理由というか、そこには何があったから、やらなかった、できなかったということになっているのか。

その辺が、私たちが今回、連携・横断ということを考えている中には、市の施設同士の横の連携とか、部署を超えた職員同士の連携とか、そういうことを通じて、予算の問題であったり、人的なリソースの問題であったり、そういうものは、そう簡単にどこの施設もよくなるとはやっぱり思えないんですよ。そういう中で、横断や連携というのはその部分を補って、先に進める可能性を持っていると思える一方で、でもそれをやること自体が負担になってうまくいかないということもあるだろうかと、ちょっと両方を考えているところがあって。

そう考えたとき、先ほどよぎったけれどもやらなかったというところには何があったのかというのを伺えると、私たちが考えるヒントになるかなと思ったんですが。

芸小担当者 連携もいろいろな度合いがあると思うんですけど、例えば場所を貸して、私たちが谷保の南のほうで何かやりたいから、郷土文化館を貸してね、それも一つの連携ですよ。それに対して広報もやってねというのも連携です。ただ、もうちょっと求められるのは、やはり一緒に企画をするということだと思ってるんですよ。そのときに、その企画の内容がお互いにとってどのぐらい必要性というのか、そういったものが見いだせるかというところで、連携そのものが目的ではなくて、やっぱり企画の内容が目的なわけですから、そういったものが見いだせるのかなというところですね。

うちが何をやろうとしたか、ちょっと思い出せないんですけど。当然、同じ財団の中だし、何かやってもいいんじゃないかというのは常に思っていて、でも、じゃあ、何をやろうかというところまでは至ってないというところだと思います。

例えば、全部自分の話になって申し訳ないんですが、今やっているオペラの中では、国立市の縄文時代を感じられるものがあるので、縄文時代の非常に立派なものが郷土文化館にありますよね。じゃあ、そのオペラの前にちょっとプレ講義みたいな形で、学芸員さんにそのことを話してもらおうとか、それも方法だと思うんですけども。ちょっとそこまでなかなか至っていない、そこまでする必要があるかなとなっちゃうと、どうしても本筋のオペラのほうに手が取られちゃうので、できてないかなというところがありますかね。

石居委員 全然、他自治体の話ですけど、群馬のかみつけの里博物館という、古墳がある場所をそのまま博物館にした施設があるんですけど。そこは古代を再現する劇というのを、博物館の主催事業として市民が古代の衣装を再現するところから、シナリオを作るところから、市民が中心になりつつ、そこに歴史系の専門家と演劇系の専門家がバックアップするような形で、最初の劇を作るまで

三、四年かけて、それから毎年上演したりするということをやっていたりするんですね。もちろん、それぞれの自治体の事情はあると思うので、あれですけども。

例えば、そういう演劇的な要素と歴史的な要素みたいなものを組み合わせた事業というようなことだと、そこには先ほど言ったメリットというところにつながる、活路が開けるといような感じで、外から見ると簡単にイメージしちゃうんですが。例えばそういうことがあれば、メリットというふうに感じられるようなことになりますか。

芸小担当者 そうですね。お互いの活動を広める意味ということでの連携というのはあると思います。でも、実際それをやるに当たっては、我々スタッフだけではない、演出家だったりも要るので、その人たちにもよりますよね。

石居委員 分かりました。ありがとうございます。

じゃあ、すみません。1時間ちょっと過ぎてしまいました。本当にお忙しい中、こんなに遅い時間まで時間を取っていただき、ありがとうございました。

(「ありがとうございました」の声あり)

芸小担当者 どうぞ、場所も人間も使ってやってください。

生島議長 ありがとうございました。

石居委員 それでは、ヒアリングはここまでとします。

(くにたち市民芸術小ホール担当者 退室)

生島議長 お疲れさまでした。

石居委員 司会をお返しいたします。

生島議長 はい。ありがとうございました。

なかなかボリュームのある御報告をいただいたのと、石居委員からも言っていたいただきましたが、非常に積極的にやっておられる姿というのが浮かび上がってきたという。あとは、様々な事業を非常に手広くやっておられて、そういったことが、すごく数が多くなっているの、一つ一つに向かい合えていないみたいな話も出てきましたけれど。今回の一つの鍵は、アウトリーチとしてどういうふうに連携していくかというの、かなり捉えられてきたのかなと思っております。

少し残りの時間で、今日のヒアリングの内容を振り返りたいと思いますけれども、まずは司会をしていただいていたお二人、伺ってみてどうだったかというようなことをちょっと語っていただければいいかなと思っておりますが、いかがでしょうか。どちらからでも結構ですけども。

砂押委員 いただいた報告を見て、アウトリーチを一生懸命やっていると言いつつも、年6回でしたか、大体そういうパターンですね。例えば2021年度でいうと、6回やっているうちの現代ダンスというのは同じ方が3回、音楽が2回、美術と演劇というのが八小の展覧会の企画が1回、やっぱり生涯学習というか、学校教育に対してすごく、一生懸命やっているなという印象はしました。平成

24年、25年、26年の公会堂の話もありましたけれど、大分前の話です。文化芸術に親しんでもらうという意味ではいいのかもしれませんが、ちょっとターゲットが、あまり大人に向いていない、アウトリーチはほとんど子どもに向いているなという感じがしました。

生涯学習というと、もう少し幅広さがあってもいいのかなという気がして、さっき私もほかにプログラムはないんですかと聞いたのも、地域創造という財団法人が、いろいろプログラムを持っているんじゃないかと思って聞いたのですが、人の問題と施設の物理的な問題もあるのでなかなか難しいというお答えが返ってきたので、もう少し、バラエティーさというか、多様性があってもいいのかなと感じました。

人材育成のところも、今のプロデューサーの方がかなり一人で頑張っているなという印象があって、多分残りの嘱託のお二人というのは、もちろん企画を担当されているんでしょうけど、相当お一人で頑張っているような印象を受けましたので、いわゆる継続性というか、持続可能性というか、次世代をどうやって育てていくのかなという心配は、少し感じました。

私は以上です。

石居委員 何となく最後のほうにしゃべったことに尽きているような気が、私自身はしているんですけども。芸小さんがいい、悪いということではなくて、社会教育、途中で私たちがやっていることは教育ではないというふうにおっしゃっていたので、そう言われてしまうとちょっとあれなんですけれども。やっぱり社会教育施設という目線で見ると、本当にそういう意味では外へ、外へ広げていくという姿勢はすごく印象的だったし、大事なことだと思うんですけども、一方で、それだけではなくて、そこをきっかけにして関心を持った方を、どうやってうまく引き込んでいくのか、それは別に無理に営業して引き込むとかではなくて、少し門戸を広げておいてあげる、それは途中の議論でもありましたけれど、アウトリーチをやってもらえるのかという問合せができるのか、できないのかも分からない状態だと、たまたま引っかけた人は来るけれど、そうじゃない人は来ない。やっぱりそこをもうちょっと開いてあげることで、巡り巡って、多分芸小さんにとってもプラスになる、それは芸小さんに限らず、社会教育をする人にとってもプラスになる、リターンもあるんじゃないかと思うんですが、その部分がちょっと課題なのかなと思ったことと。

あと、最後に伺った横の連携で、今回は郷土文化館の話が出ていましたけれども、それぞれに専門性があって、自らの専門性をベースに考えてしまうと、それはやっぱり相手は自分より劣るといえるのは間違いのないことだと思うので、そこをどうやってお互いの持ち味のようなものを、うまく尊重しながらお互いにとって損がないようにやるかということが、多分連携ということでは大事なんだと思うんですけども、そこをどういうふうに突破していくのかなと。今回は、そういう意味では、連携していく上での課題というところが見えたような気がするんですけども。

逆に、そこを少しでも今後のヒアリングの中で、乗り越えていく手がかりとか、実際にやられていることとかというのを伺えると、少し話がつながっていくかなというふうにも思いました。

以上です。

生島議長 ありがとうございます。

教育施設ではないのというふうに言われたのは、本当はかなり印象的で。やっぱり芸術文化というのを育てていくとか、人を育てていくという視点というのは、なかなか難しく捉えられたところでは、本当にあったところなんです。

ほかの方々も、ぜひ忌憚なく御感想等いただければと思います。また、次への課題とか、そういうこともいいかと思います。いかがでしょうか。

中野委員、お願いいたします。

中野委員 私も教育施設ではないということが非常に引っかけたところですけど、アウトリーチの考え方として、外へ行っての事業展開というのをおっしゃっていたんですけど、市の施設でもあるわけですから、社会教育とか生涯学習というような観点から見ると、地域との連携というのがもっと重要視されてもいいんじゃないかなというふうに思いましたね。学校だけではなくて、市全体、年齢層問わずに、地域での社会学習、生涯学習を芸小ホールが提供してくれるんですというのは、多分誰も知らないと思うんです。私も今日初めて知ったので。

だから、我々の立場と、芸小ホールの皆さんの立場と違いますので、お話を伺っていると、やっぱり事業展開が中心なのかなというふうな気がしました。事業をどうやってこなしていくかという、お仕事として捉えていらっしゃるというふうに思えたんですけど。それはそれで仕方ないのかなとも思うんですけど。私どもの地域からアプローチができるんだということが分かったということで、私には収穫がありました。

生島議長 ありがとうございます。

ほかには。矢野委員、お願いいたします。

矢野委員 いずれにしても衝撃的で、ちょっと言葉を失って、その後、全然しゃべれなかったんですけど。要するに、事業をやっている正職員は1人しかいないと。あとは嘱託で、5年以上過ぎても正職員になれないで、嘱託員をやっているということですよ。その人たちはどういうモチベーションで仕事をしていけばいいのか、そこのほうに、職員の側に立っちゃうので、ちょっと言葉が継げなくなっちゃったんですけど。

主査の方は非常に正直にそういうことをおっしゃっていたし、事業が増え過ぎたということもおっしゃっていたんですけど、結局、この連携というのは、地域創造も連携だけでも、もう一方の視点から見ると、助成枠を生かした事業って言っていますよね。要するに市の財源を少なくして事業を増やすということで、これは助成金が取れるということで増やしていつているという面も、多分あると思うんですよ。それで増えてしまったと。だから、ちょっと事業を絞ったほうがいいというような、非常に正直なお話をされていたと思うんですよ。

だからある程度絞っていかないと、今の連携のこともそうですけれど、地域に入っていくにも、今お聞きした体制ではとても難しいんじゃないかというのが正直な感想で。本当にたくさんの事業をされていますので。そういうふうに思いました。

生島議長 ありがとうございます。

ほかの方はいかがでしょうか。朝比奈委員、お願いします。

朝比奈委員 今日お話を聞いていて、特に資料の1枚目の下のほう、[5]その他のところで、共催事業で国文学研究資料館と芸小ホール、多摩信用金庫と連携してやっていますという話がありました。私も多摩信用金庫に行ったとき、ポスターなんか見るとかなり、多摩信用金庫ではこういう事業に力を入れていますので、一つのこれからの方向として、かなりのところで財政状況が厳しくなっ

いく中で、企業あるいは団体とうまくと言うと語弊がありますけれども、手を結んでいくというのは、問われてくるのかなということを感じました。

八小でオリパラの事業をやっていると、アスリートを紹介しているというふうにありましたけれども、私、八小は近くなものですから、時々行くんですけども、かなりオリパラの人の顔写真も紹介をされていて、取組が克明にされていますので、身近に感じていくという意味で、こうした取組も共催事業の一環でやっていくというのも、一つの道なのかなと感じました。

以上です。

生島議長 ありがとうございます。

日野委員、お願いいたします。

日野委員 学校がメインターゲットというお話もございましたので、もっと頑張らなきゃということも感じたところでございますが。

校長会でも説明を受けて聞いているんですけども、私も途中で質問しましたが、そこまでフレキシブルに対応していただけるのかどうかというところまでは、分からなかったですね。今日のお話で、そういう細かい対応もしてくれるんだなというのが分かったので。やっぱり、こういうきっかけって、連携を進めていく上ですごく大事なんだなというのは、改めて感じたところです。

何がきっかけになるかということ、偶然といいますか、スーパーさえきもそうですが、そこにどうしても頼らざるを得ないような状況で。ここが少し何かシステムができると、いろいろな部分が進んでいくのかなという感想を持ちました。

あわせて、やはり連携をすることで何を生み出すのか。その企画ですね。必要性があって、双方にとってウィン・ウィンなものになっていくものをどうつくっていくかという企画性というのもすごく大事なのかなということも改めて感じました。

生島議長 ありがとうございます。

私も今、企画性って本当にそうだなと思うのと。もう一つ、スーパーの件、今回の突破口としてはよかったんだと思うんですけど、それを、何でもかんでもどんどん頼まれてくるようになると、イベント屋になっていっちゃうんですよ。そうじゃなくて、一緒に考えていく相手になる施設の人たちにも、すごく負担というか、力添えが必要だという意味では、そこを協議できていく、相手側の認識だったり、一緒に企画をつくっていく、そういう余地というのが必要なんだろうなというふうにも思っていて。その辺りが、これからまた違う施設にもお聞きしていくところだと思いますけれども。

向こうも手を出してもらわないとつなげないというようなことが見えてきたなというふうには思って、伺っていたところです。

どうですか、まだ発言されていない方。せっかくなので。栗畑委員、いかがですか。

栗畑委員 今日の話はそれなりに、本当に現場の現実的なことを聞かされて、よかったと思います。1回目としてはどうなるかなと思っていましたけれども、まあ、本当に主査さんですか、いい方というか、よく話してくれたと。

今日のことよりも今後の中で、まず1回やってみて、次回は郷土文化館、その次が体育館、この3つを連続で、指定管理団体である、略称財団が来てくれるわけですね。その辺の中で、みんな財団の中の部署ですよ。だから、3回が終わってからなのか、3回目の最後で入れるのか、もう少し話を聞いてからで

いいと思うんですけど、財団、指定管理者というところが本当にうまく回ってやってくれているのかみたい。期待はしているんですけど。

最後に、オアシスって、市民は大体見るんですけど、一番最後のところに「募集」と、嘱託職員。時給1,200円。でも、65歳まで。ただ、これは要はお手伝い的なもので、今言った企画とかそういう方を募集しているわけではないです。

以上です。

生島議長 ありがとうございます。

笹生委員。

笹生委員 笹生です。お疲れさまでした。やはり皆さんがおっしゃったように、教育機関ではないという発言がすごく引っかかりました。もちろん、お話しいただいたお二人が何か問題があるということでもないと思いますけど。

なので、やはりここは、あくまで社会教育施設であって、イベント屋ではないんだよというようなことを、何か訴えかけるようなことは必要なのかもということ、ぼやっと、ちょっと思いました。ただ、指定管理なので、独立した法人なので、なかなか意思疎通は難しいところがあると思うんですけど、その辺の文化を育むといたしますか、そういった必要性はやはりあるなということ、ちょっと思いました。

それと、矢野委員がおっしゃったとおり、最後にも話がありましたけど、嘱託であるということですが、多分、来月も再来月も、似たような状況なんだと、きつと思います。なぜなら予算に限りがあるわけですから、嘱託のほうが圧倒的に効率いいわけですから。

なので、そうなってくると、ノウハウなり専門性が蓄積されていかないという問題は、多分どのような団体にもあり得る話だと思うので、そこをどのようにうまく仕組みをつくり替えていくかというようなことは、今後少し考えていくべきテーマなのかなと思います。

ちなみに、私が担当するのは体育館ですが、スポーツ施設でも、公共施設でスポーツの指導員のノウハウが蓄積されていかないということはすごく大きな問題になっていますので、多分国立市も御多分に漏れないんじゃないかなと予測はしています。ちょっと分かりませんが。

というわけで、一つ私の個人的な興味としては、職員の専門性をどう蓄積していくかというのは、今後一貫して考えていきたいなと考えた次第です。

以上です。

生島議長 ありがとうございます。

では、倉持副議長、お願いいたします。

倉持副議長 倉持です。砂押委員、石居委員のおかげで、初回にもかかわらず、大分スムーズにヒアリングできたかなと思います。どうもありがとうございました。

お話に来てくださった方も本当に率直に話してくださったので、あんまり形式張らずに、そういう意味では、こちらがびっくりするようなことも含めて伺えたというのは、アンケート形式ではなくヒアリングとしたかがあるなと思いました。

私も新鮮に感じた部分としては、マネジメントの部分というんでしょうか、運営の部分、ポジションがそういう方だということもあるんですけど、私たちとしては事業について聞いているんですけど、事業の背後にあるマネジメントの部分、人に関することもそうだし、予算に関することもそうなんですけれど、

その部分を比較のお話の中で出てきたというのが、当然のことながら事業だけで成り立っているわけではないので、その基盤みたいなところを、生涯学習ということで考えなくちゃいけないというのは、皆さんの意見にも表れていたとおりがなと思います。

やっぱり直営ではないというところで、集客とか収益の問題というのが比較的話の中で出てきて、かえってそれは逆に公共施設で持ちづらいというか、強く意識しない部分だったりするので、それももちろん運営という意味では大事だなというふうに思いながら聞いていました。

私自身は、今回聞いて、次以降のヒアリングの問題意識として、質か量かというんでしょうか、クオリティーという単語がたくさん出てきたと思うんですけど、本当に国立市ならでは、高い質の学習事業というか、著名な方がいらっしゃる、質の高い企画を展開するということと、数だったり、それを受ける受け手のほうの市民への広がりというところの、バランスというか、そこをどういうふうに捉えていくのか。連携ということと関わって、連携というところが数の広がりみたいなことを目指すのか、質の高まりみたいなことを目指すのか、もちろんその両方の軸を持つのかということについて、今回少し問題意識を持ちました。

もう一つ、企画性ということが度々、こちらでも話題になったんですが、職員の体制と関わって問題になったんですけど。職員の能力とか専門性ということと、企画性ということ、アウトリーチ、連携に関わってコーディネートをするという調整的な部分というのは、全て職員が担うべきものなのか、あるいは職員は、企画調整と通常の事務能力とどういうふうに、求められる水準というか、企画性という、それこそその部分も共同でできたり、外に出したりすることで解決できないのかとかいうところも、少し問題意識としては持ちました。次以降のヒアリングでまたいろいろと伺って、深めていけたらと思います。ありがとうございます。

生島議長 ありがとうございます。

本当に率直にお話しいただいた、初回から本当に中身の濃いヒアリングができたかなと思います。司会のお二人、本当にありがとうございました。

では、今日の振り返りはこのくらいにいたしまして、次に進めさせていただきたいと思います。

次第3の事務局からの連絡ということですが、その前にちょっと確認ですが、来月は郷土文化館ということで、司会をお願いしているのは中野委員と矢野委員です。司会席はこちらになりますので、来月はぜひこちらで、よろしく願いいたします。

では、事務局からの連絡事項をよろしく願いいたします。

事務局 事務局からの連絡事項でございます。資料3と4についてでございます。

まず、資料3は、12月4日に行われました都市社連協第2ブロック研修会の要綱と、当日の資料となっております。こちらは、委員としては中野委員に御参加いただき、倉持副議長は立川市の議長というお立場で参加されておりました。

概要といたしましては資料3のとおりでございます。第1部は講演で、「伝統文化を未来へつなげる社会教育」、拜島地区伝統文化保存継承委員会会長の原島氏にお話をいただきました。その後、第2部講演、「村山大島紬について」ということで、田房染織有限会社取締役の田代氏からお話をいただくという、講演が2本立てという内容になっておりました。

続きまして、資料4は、12月11日、第2ブロック研修会の翌週に開催さ

れました、都市社連協交流大会、社会教育委員研修会の資料でございます。概要といたしましては、1枚おめくりいただきまして、記載のとおりでございます。こちらの中野委員に、当日御参加いただいております。

内容といたしましては、第1部は交流大会としまして、主催者の御挨拶の後、11月11日に実施がございました第52回関東甲信越社会教育研究大会の実施報告、各ブロックで実施されたブロック研修会の報告がございました。その後、第2部といたしまして社会教育委員研修会ということで、郷土芸能を地域で受け継ぎ、発展させる武蔵国府太鼓の紹介とインタビューということで、武蔵国府太鼓響会という市民グループの方々をお招きして、お話を伺うという内容となっております。

資料3と資料4の説明は以上でございます。

生島議長 ありがとうございます。

この間、2回の研修会が開かれておりまして、どちらにも中野委員が御出席いただいていたんですけども、中野委員、御感想とか気づきの点があったら、一言いただければと思いますが、お願いいたします。

中野委員 先に出席したのは、第2ブロックのほうです。村山のほうで行われた研修会では、「伝統文化を未来へつなげる社会教育」というテーマで、拝島のお祭りと村山の太鼓の話があったんですけど。このテーマに対して、お祭りを守っていきこうということに関しましては、この団体の方は考え方として、6ページにあります祭礼とか神事を大事にしなきゃいけない、それを守っていききたいという話があったんですけど、そうすると信徒とか檀家の方が中心になって、市民を巻き込むのは難しいんじゃないかなというふうに感じました。それを別にして、お祭りはお祭りとしてやっていけば、市民の方が参加しやすいのかなと感じました。

村山太鼓のほうは、お仕事としてやられているわけですので、文化を守るという観点からすると、太鼓を守るのであれば、企業としてはどういった使い方をするのか。太鼓を単なる衣類として残すというのはなかなか難しいと思うんですね。それを着る方というのは減る一方なわけですから。繊維も、絹をどういうふうに使って、そういう開発をするといいますか、そういったところに力を入れたほうがいいんじゃないかなと、聞いていて思いました。

府中のほうでは、最初に関東甲信静の振り返りがあって、小さな学びが大事だ、地域が大事だというような振り返りがあって。そういうことからすると、PTAからの脱退が相次いでいるとか、地域を無視するような流れが止まらないというようなことが問題だという話がありまして。それで研修会に入って、府中の武蔵国府太鼓という団体といいますか、市が主権しているようなんですけど、その会長以下の方がお話とセッションをされたんですけど。子供のときからそういう団体に入っているということは、社会教育の場としてすごいことだなと、本当に子どものときから大人と付き合っているわけですので、そこで物すごい学びをされているなという感じがしました。

そういった中で、府中の伝統文化を社会教育につなげているというのは、素晴らしいことをやっているんだなと、つくづく感じました。

話は戻っちゃって申し訳ないですけど、関東甲信越静のときの基調講演、倉持先生がお話しされた中でも、困難にぶち当たったとき乗り越える力をつけるというような、そういった教育がやっぱり必要かなと。そういった言葉があるのかどうか分からないですけど、レジリエンス教育みたいなものが必要なんじゃないかなと、全体を振り返りながら感じました。

以上です。

生島議長 ありがとうございます。

倉持副議長も、立場は違いますけれども、その場にいていただいたということで、何か一言あれば、ぜひお願いいたします。

倉持副議長 12月4日の武蔵村山市での研修会は、すごく面白かったんですけど、伝統文化というのはただ引き継いでいくものじゃなくて、時代、時代に応じた困難みたいな、それは上からの統制みたいなものだったり、金銭的なものだったり、あるいは住民の理解だったりするんですけど、そういうのを乗り越えて守り続けるものと、つくっていくものみたいなものがあると。当たり前のことなのかもしれないですけど、例えば昭島のお祭りのほうの原島さんなんか、本当に青年の頃からというか、何十年もその活動をやられていて。だけど、ずっと同じことをやっているかというのと、そのとき、そのときの困難を乗り越えていらっしゃる、その語りがすごく印象的でした。

村山大島紬のお話も、村山はこの辺の多摩地域で唯一駅のない市ですというお話から始まったんですけど、そういうのどかな地域の中で、地域の特性とアイデンティティーとか、歴史みたいな部分も関わりつつ、それを周りの人に、住民にも理解してもらいながら、地域の誇りある文化、国にも理解してもらおうような文化として、どうつくり上げていくかというような、お二人ともその道で長くやってこられた方の話だったので、今の中野委員のお話じゃないですけど、困難に打ち勝ちながらも、しかし、仲間と一緒に巻き込みながら、あるいは行政の理解を得ながら展開していった、発信していくということの重要なプロセスに、やっぱり学びというのがあるんだなと改めて感じさせられて、とても面白かったというか、勉強になりました。

来年、第2ブロック研修会は立川市が幹事市なんです。ぜひ御参加いただければと思います。御協力ください。よろしく申し上げます。

生島議長 ありがとうございます。

では、今日の議題はこれで終わりになります。事務局から、最後に御案内をお願いいたします。

事務局 次回の開催日程の御連絡でございます。

今回は1月25日火曜日、午後7時から、こちら同じ国立市役所3階の第1・第2会議室で開催いたします。今回は、施設担当者ヒアリングの郷土文化館のパートとなります。

御連絡は以上でございます。

生島議長 ありがとうございます。

その他、御質問等ございますでしょうか。よろしいですか。

なければ、これをもちまして本日の会議を終了いたします。どうも皆さん、お疲れさまでございました。どうぞよい年をお迎えください。

— 了 —